

琉球大学学術リポジトリ

高機能自閉症児における社会性障害の改善に関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-06 キーワード (Ja): 高機能自閉症児, 社会性障害, 自己制御, ファンタジー, 自閉的ファンタジー, 共同注意, 愛着関係, 指さし キーワード (En): high-functioning autism, social disorder, self-control, fantasy, autistic fantasy, joint attention, attachment, pointing 作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9087

高機能自閉症児における「指さし動作」の特徴

松島はるか 神園幸郎

日本特殊教育学会
第41回大会発表論文集, 2003年

高機能自閉症児における「指さし動作」の特徴

— 行動の制御機能における質的变化を背景として —

松島 はるか 神園 幸郎

(琉球大学)

KEY WORDS: 高機能自閉症児 指さし 制御機能

これまで筆者らは高機能自閉症児の不自然な動作を制御機能との関連で検討してきた。その結果、行動の制御が他者制御から自己制御に移行するにつれて、高機能自閉症児が示す不自然な動作は質的に変化することを見出した。筆者らは不自然な動作の中でも、彼らが示す指さし動作がいわゆる対象指示機能とは異なる特有な性質を帯びているとの臨床的な印象を得ている。そこで今回は指さし動作という特定の動作に焦点を当て、制御機能の移行に伴う指さし動作の質的变化を記述する。

方法

1. 対象児 対象児は現在小学校5年生の通常学級に在籍する自閉症男児(R)である。1歳頃に発語が見られ、2歳2ヵ月時には簡単な文章を読めた。本児は観察開始直前の3歳3ヵ月時に障害児保育の該当児として公立保育所に入所した。
2. 分析資料 本研究は母親の手記(0:06~4:07)、保育記録(3:03~5:10)、保育所場面のVTR資料(3:05~4:11)を分析資料とした。
3. 分析方法 VTR資料から抽出した指さし動作は、自作のカテゴリーに基づき分類された。母親の手記と保育記録からは、指さし動作と制御に関わるエピソードが分析された。

結果と考察

本児に出現した指さし動作を、他者制御期と自己制御期に分けてその特徴を分析した。

他者制御期(3:05~3:09): 本児は保育所に入所した頃、アイコンタクトが出現し発語も活発になった。ちょうどこの頃に指さし動作が出現した。しかし、この指さし動作は極めて特異な様相を示した。すなわち、*母親の指さすモノを見つけるため、本児はまず母親を指さして近づき、次に母親の指さしに自分の指さしを重ねて、母親が指さしている方向を確認する。そして、指さしをしたまま、後ろを振り返り母親の指さす方向を確認しつつその方向へ前進する。しかし、母親の指さす対象を見つけることはできない(エピソード1)。*

入所後、本児は保育士から生活動作に纏わり度重なる指示を受けた。すると本児なりの適応動作として、保育士の指示言語と指さし動作の双方を自らなぞるような行動が出現しはじめた。たとえば、次の例がその場面である。Rは「上靴履いて」と言いつつ手の平が上向きの指さし(図1)で靴箱を差し、教室の中にいる保育士を見る。再び靴箱を見て通常の指さし(図2)をしてから靴箱に近づくと、すぐに靴箱から離れる(エピソード2)。

「上靴はいて」と命令する他者の指さしは、手の平が上を向いていたのに対して、行動に繋がる自己の指さしは手の甲が上を向いていた。このことから、本児は命令する他者と行動する自己の両者の視点からの指さしを同時に行っているものと推察された。そこで、この種の指さしを「行動命令の指さし」と命名した。生活動作の発動契機としての他者と自己の分化した指さし動作は、その後他者との問いと応答の対話場面にも出現するように

なった。Rは教室からトイレを覗いている。そこへ女兒が「なんでこっちいつんの?」と近寄る。Rは女兒と目を合わせた後、トイレに向けて手の平を上にして指さし、次に通常の指さしの手を上下に3回振りながら「1,2,3じゃなァい?」と女兒を見て言う(エピソード3)。これは女兒の質問が本児に問いの形式を発動させる単なる契機にしかすぎず、本児にすでに内在していた特有な問いと応答の対話場面が露呈した場面と考えられた。そこで、これは行動の発動の契機が現実世界に起源を持つ「前自己内対話の指さし」とみなされた。その後、この「前自己内対話の指さし」は対象物が内化した身振り、すなわち映像的身振りによって対象物をイメージ化した上でそれを指さす身振りへと変質した。次がその例である。Rは排泄を我慢しているためそわそわと動き回っている。床に落ちているブロックを拾って保育士が使用している机に置きに行くが、保育士は本を見ているためRに気がつかない。するとRは保育士に背を向けて、両手の人差し指で胸の前の空間に四角を描き、指さしの手を上下に3回振りながらその四角の中心を差す。次いでRは自分でトイレの前まで行くが、トイレに入ることはできない(エピソード4)。

自己制御期(3:10~4:11): 自己制御期に入ると、自己の内面に閉じたいいわゆる自己内対話に基づく指さし動作が優勢になってきた。しかも指さし動作の内容も現実世界に起源や対象を持たない「自己内対話の指さし」へと変質した。Rは一人でベランダにいる。振り返って壁を指さし、上目遣いで何かを話しているが、Rのまわりには誰もいない(エピソード5)。

一方、行動を制御していた指さし動作が情動をも制御する機能を持ちはじめた。学芸会の発表中、Rは舞台上に立ち、子どもたちが踊っている姿を横から見ている。踊っている子どもたちの前を横切って、舞台袖の保育士に近づく。保育士は元の場所に戻るように指さして指示する。Rは保育士に指示された場所を同様に指さし、次いでもう一方の手で保育士の側から指示された場所へ向けて弧を描くように指さす。その後Rは指示された場所まで戻っていく。しばらくRは横にいる子どもたちを漠然と見ている。すると保育士が近寄り、Rの立つべき位置を指さして指示すると、Rはその位置を確認するかのように片足で踏みしめる。しかもその足を軸足のよう固定したまま、膝を曲げずに不自然に動きはじめる(エピソード6)。普段見られない落ち着いた身体動きをしていることから察すると、本児は抑圧的な状況にあったと考えられた。しかしながら、本児は保育士の指さしを頼りに自らの指さし動作や片足で、舞台上にアンカーを印すことでその場に留まった。まさに指さし動作が自己の情動をも制御したと言えよう。

まとめ

本児に出現した指さし動作は、対象指示機能を持つ指さし動作が極めて少なく、上述した特異な機能を持つ指さし動作が大勢を占めた。さらに、それらの特異な指さし動作は制御機能の変化とともに大きな質的变化を示した。他者制御から自己制御に移行することにより、第一に表象による内的操作が指さし動作として顕現化し、第二に自己の情動をも制御する機能を持ちはじめた。

表象による内的操作が指さし動作として表れるとすれば、本児の指さし動作を身振りの一形態と見なした分析を通して彼の思考過程を描きだすことができるかもしれない。

(MATSUSHIMA Haruka, KAMIZONO Sachiro)



図1 「他者」の指さし



図2 「自己」の指さし

自閉症児の社会性障害と社会的コミュニケーション行動の関係について

又吉ゆうき 豊里優奈 神園幸郎

**日本特殊教育学会
第41回大会発表論文集. 2003年**

自閉症児の社会性障害と社会的コミュニケーション行動の関係について

又吉 ゆうき 豊里 優奈 神園 幸郎

(琉 球 大 学)

KEY WORDS: 自閉症児 社会性障害 コミュニケーション

本研究では自閉症児における社会性障害の起源を探るために、社会的コミュニケーション行動の発達過程を、自閉症児とその親および特定の他者との愛着関係の変遷に照らして検討する。本研究では社会的コミュニケーション行動として、模倣および鏡像反応をとりあげた。

方法

1. 対象児 対象児は知的障害養護学校の小学部 3 年に在籍する自閉症女児である。本児が 4 歳 5 ヶ月のときに本研究の観察が開始された。本研究では、本児が 4 歳 5 ヶ月から 8 歳 1 ヶ月までの期間を分析対象とした。5 歳 3 ヶ月時に行なわれた新版 K 式発達検査における発達指数は 61 であった。

2. 手続き R 大学の遊戯室にて月 1~2 回、約 20 分の親子自由遊び場面と、特定の他者との他者自由遊び場を設定した。それぞれの場面を VTR に収録し、トランスクリプトして分析に利用した。VTR 資料の中から模倣および鏡像反応の場面を抽出して DVD に編集した。

3. 分析方法 親子自由遊び場面と特定の他者との他者自由遊び場面の VTR 資料とトランスクリプトをもとに遊びの全体的な特徴、愛着行動などの視点で対象児と親および特定の他者との関係を発達の的に分析した。模倣については、2 名の評定者の両者が一致して抽出した模倣場面を「音声」と「動作」に分類した。鏡像反応については、DVD に収録した鏡像反応場面を自作のカテゴリーにもとづいて分類した。

結果と考察

1. 対人関係の変遷

1) 親子関係の変遷 80 回の親子場面について分析を行なった結果、親子の関係性の質の違いによって以下に示した 8 つの時期に分けられた。

第 1 期 (1 回~4 回) : 本児は自らの要求を実現するために道具的対象としての父親へ接近した。一方、母親は本児と上手く関わらず、母子関係は希薄であった。

第 2 期 (5 回~15 回) : 本児の母親への志向性が芽生え、母親を愛着対象とみなした行動が現れた。

第 3 期 (16 回~29 回) : スーパーバイザー K の介入により、母親の指示的な関わりが受容的な関わりへと変化した。それに呼応して本児の母親への志向性が一層高まった。

第 4 期 (30 回~39 回) : 母親の意識変革に基づく本児への積極的な関わりによって、本児は母親の内面性に気づき、しかもそれへ働きかける行動を示すようになった。

第 5 期 (40 回~45 回) : 本児が自己の内面性に気づくようになると、母子の相補的關係が成立し、双方向的なやりとりが実現した。

第 6 期 (46 回~55 回) : 環境の変化によって本児は情緒不安定になり、母子関係が希薄化した。

第 7 期 (56 回~62 回) : 本児が学校生活に慣れ落ち着きを取り戻すと、良好な母子関係が回復した。

第 8 期 (63 回~80 回) : 良好な母子関係の中、本児は自己の情動が母親に及ぼす効果についても理解できるようになった。

2) 他者関係の変遷 分析期間中、特定の他者として 4 人が本児と関わった。以下にそれぞれの特徴を示す。

他者 1 (1 回~25 回) : 本児のモノへの固執傾向や母子分離不安から生じる場面逃避によって本児と関わるのが困難な状況が続き、道具的な関わりに終始した。

他者 2 (27 回~42 回) : 興味ある遊びを提供し、本児への接近を試みたが、本児は自らが興味を示す遊びの場合にのみ他者 2 に道具的な関わりを示した。

他者 3 (43 回~65 回) : 本児に対して指示的に関わったため、本児は拒否の態度を示し、場面逃避を頻発させた。

他者 4 (66 回~80 回) : 本児に受容的態度で寄り添ったため、本児の側に他者 4 への志向性が芽生え、愛着行動が出現した。

2. 模倣

1) 音声模倣 親子関係の変遷と音声模倣 : 第 3 期にスーパーバイザー K の介入によって母親の本児への模倣要求が減少し、それに伴って音声模倣数が減少した。しかし、第 4 期、第 5 期にかけて本児が母親と自己の内面性に気づいたことで母子の双方向的なやりとりが増加し、音声模倣数も増加した。ところが、本児が情緒不安定な状態に陥った第 6 期になると、希薄になった母子の関係を反映して音声模倣数が減少した。第 7 期、第 8 期に母子の関係が回復すると、音声模倣数も増加した。以上の結果から、親子場面での音声模倣は母子の関係性と密接に関連していることが明らかとなった。

他者関係の変遷と音声模倣 : 他者 2 の場面では興味ある遊びの提供や模倣の要求など他者 2 の関わりが影響し、音声模倣数は最も多くなった。他者 3 の場面では両者の関係性が築けなかったために、模倣を要求する割合が最も高かったにも拘らず、音声模倣数は最も少なかった。一方、他者 1 と他者 4 はともに模倣要求をしていなかったが、他者 4 の場面でのみ音声模倣数が多かった。恐らく、この頻度の差はそれぞれの関係性が影響していると考えられる。

2) 動作模倣 親子関係の変遷と動作模倣 : 第 3 期以前では模倣が上手くできない場合、本児は親を見ようとせず、すぐに関心をなくして別の遊びへ移行する傾向が見られた。しかし、第 4 期以降になると、母親の動作を上手く模倣できない場合、本児は自ら母親に働きかけて動作の再現を要求し、母親の動作を見て再試行するようになった。このことは本児が母親とモノとの関係でその動作が成立することを理解し、行為主体である母親へ関心を示したことを物語っている。

他者関係の変遷と動作模倣 : 他者 1、他者 2 そして他者 3 の場面では、動作の再現を要求するなど本児が他者に働きかける行為は見られなかった。しかし、他者 4 の場面では動作模倣に対する他者 4 の適切な言葉かけを契機に、両者間に情動を共有する状態が生起し、遊びが展開した。

3. 鏡像反応

1) 親子関係の変遷と鏡像反応 自己像に対する鏡像反応の出現頻度は、第 5 期以降に急激に増加した。意図的な動作時の鏡像反応が多く、中でも情動表現の割合が大半を占めた。第 5 期以降は自己と母親の内面性の気づきから他者への情動を鏡を介して確認することが増加した。よって、母子の関係性と鏡像反応が密接に関連していることが指摘できる。

2) 他者関係の変遷と鏡像反応 自己像に対する鏡像反応の出現頻度は、他者 3 と他者 4 の場面で増加した。いずれもモノの操作時の鏡像反応が多く、本児の好きなシャボン玉遊びの時の鏡像反応が大半を占めた。また、他者への情動を鏡で確認した親子場面とは違って、他者場面ではモノの操作時に快の情動を鏡で確認する鏡像反応が多かった。

(MATAYOSHI Yuki, TOYOSATO Yuna, KAMIZONO Sachiro)

高機能自閉症児における「不自然な動作」の成り立ち

松島はるか 神園幸郎

日本特殊教育学会
第42回大会発表論文集. 2004年

高機能自閉症児における「不自然な動作」の成り立ち

— 行動の制御機能における質的变化を背景として —

松島 はるか 神園 幸郎

(琉球大学教育学研究科) (琉球大学)

KEY WORDS : 高機能自閉症児 制御機能 動作

これまで筆者らは高機能自閉症児(A)の不自然な動作を制御機能との関連で検討してきた。その結果、行動の制御が他者制御から自己制御に移行するにつれて、不自然な動作は質的に変化することが見出された。他者制御期の不自然な動作は、他者の指示動作と自己の応答動作の随伴性を一対としてなぞることにその特徴が見られた。自己制御期の不自然な動作は、社会的規範に合わせて自ら行動を制御しようとするがために結果として動作が不自然になるタイプ1と、内的活動が脱文脈的に顕現化することで動作が不自然になるタイプ2の二つの特徴が見られた。タイプ1に比してタイプ2の出現率が高いことから、タイプ2はA児に中核的な行動特性であることが推察された(松島・神園, 印刷中)。これらの知見が高機能自閉症児に普遍化できるものであるかどうかを検証するため、今回は新たな対象児(B)について検討した。

方法

1. 対象児 対象児は、現在 C 幼稚園に在籍する自閉症男児(B)である。9 ヶ月頃に発語が見られ、2歳6月時には絵本や学習ビデオの言葉を覚えて話した。4歳8ヶ月時における新版K式発達検査の結果は、全領域においてDQ105であった。
2. 分析資料 本研究は母親の手記(0:01~5:03)、保育記録(3:10~5:09)、保育所場面のVTR資料(4:05~5:09)を分析資料とした。
3. 分析方法 分析期間は制御機能の発達の变化に基づき、無制御、他者制御、自己制御の3つの時期に区分された。各時期の不自然な動作の特徴は他者や対象物との関係から分析され、それらの成り立ちが遡及的に分析された。

結果と考察

1. 不自然な動作の特徴

VTR資料に見られた不自然な動作を分析したところ、いくつかの不自然な動作が見出された。それらの特徴を以下に記述する。**学芸会、側転をする場面でBは舞台の床をでんぐり返り、手裏剣を投げるように踊る場面で両手を揉むように奇妙に動かす(epi.1, 保育所VTR, 4:08)**。この場面で、本児は統制されたダンスを踊ろうとした結果、奇妙な動作を表出してしまったと考えられた。また、次のような不自然な動作も確認された。**Bは隣に座る男児(D)のTシャツを引っ張り、キャラクターの絵柄を覗き込む。突然、BはDの胴体を両手で挟む。(epi.2 保育所VTR, 4:11)**。この場面では、本児がTシャツのキャラクターに惹きつけられたことが不自然な動作につながったものと推察できる。さらに、**Bは「F(女児)、狼に食べられる、Fはね、小さい子でね」と話しながら指を奇妙に動かしながら顔をしかめて左右に傾ける。そして「F、大変になっちゃ、Fは赤ちゃん」と話しながら再び指を奇妙に動かす(epi.3, 保育所VTR, 4:06)**という不自然な動作も見られた。これは本児の内的活動が不自然な動作となって表出されたものと思われる。本児の行動を発達の分析すると、3歳9ヶ月頃には本児の日常生活動作が自立し、しかも他者の支援を受けずに「自分で!」と言って自らで取り組むという自己主張をするようになっていた。先の研究の枠組みに基づいて、この頃から以降を自己制御期と位置づければ、上記の3つのエピソードは自己制御期における不自然な動作の特徴を示している。そして、エピソード1は先の研究

におけるタイプ1に、エピソード2と3はタイプ2に該当する。以上のように、自己制御期における本児の不自然な動作はA児と同様の特徴を示した。しかし、これらの不自然な動作が出現する発達の経過については4歳5ヶ月以前のVTRが存在しないため分析が困難である。そこで、この点を補完するために母親の手記を中心にその成り立ちを検討した。

2. 不自然な動作の成り立ち

筆者らの先行研究で見出された行動制御の枠組みを基に本児の発達の経過を検討した結果、2歳5ヶ月時に注目すべき環境の変化が見出された。それは本児がドリル学習を主とする教室に通いはじめたことである。教室で一定の時間を過ごすことができたことから、当時の本児は他者の指示に従って行動を制御できていたものと推察された。それゆえに、この時期は既に他者制御期にあったと考えられた。その後しばらくすると、手記に次のような記録が随所に見られた。**しまじろうのビデオを見て「ばくばく、おいしいね」など同じように真似をする(epi.4, 母手記2:05)**。絵本の世界と現実の世界を重ねて生活する。絵本の洗濯のお手伝いの場面を真似し、いろいろなものを洗濯バサミではさむ(epi.5, 母手記3:00)。このように、本児はキャラクターの動作を同型的になぞることで日常生活動作を獲得していた。この背景として、母親の意図のもと2歳5ヶ月頃に始まるビデオや絵本の視聴経験がドリル学習的な効果を示しはじめたことが指摘できる。この時期の本児は架空の存在モデル、すなわちビデオや絵本の中に登場するキャラクターによって行動が制御されていたといえるだろう。その後、本児は母親の指示に従って行動できるようになり、次第に母親が不在の際も、**お父さんと一緒にお勉強中、「ひいー」や「ちゃんと」、いつもお母さんに言われていることを自分で言う(epi.6, 母手記3:01)**というように、母親の指示をなぞることによっても生活動作が成立するようになった。このことは、本児が架空のキャラクターと同様に実在する他者をモデルとしても行動を制御できるようになったことを物語っている。

先述したように3歳9ヶ月を過ぎて自己制御期になると、母親の指示動作をなぞる行動は消失した。その代わりに、自らの意図に基づいて行動を制御するために動作が不自然になってしまうタイプ1(epi.1)の動作が出現しはじめた。このことは制御の主体が実在する他者から自己に置き換わった故に出現した現象として理解できる。他方、内的活動が現実場面に浸襲するタイプ2(epi.2,3)の不自然な動作は、他者制御期でモデルとなっていたキャラクターの存在が希薄になり、代わって自ら創作したモデルやそれらとの対話の物語によって動作が支配されることによって顕現化したと解釈できる。

まとめ

本児の不自然な動作は、自己制御期においてタイプ1とタイプ2が見られ、先のA児と同様の特徴を示した。それら二種類の不自然な動作の成り立ちについて遡及的に分析した結果、それぞれ他者制御期に出現する実在の他者と架空のキャラクターをモデルとする動作の制御機能にその系譜を認めることができた。さらに、この2つの異なる系譜は、ドリル学習の契機という同一の起源に発する可能性が推察される。

(MATSUSHIMA Haruka, KAMIZONO Sachiro)

高機能自閉症児における共同注意行動の出現の背景とその特徴

神園幸郎 豊里優奈

**日本特殊教育学会
第42回大会発表論文集. 2004年**

高機能自閉症児における共同注意行動の出現の背景とその特徴

神園 幸郎

豊里 優奈

(琉球大学)

(恩納村立仲泊小学校)

KEY WORDS: 高機能自閉症児 共同注意 愛着

一般に、自閉症児は他の発達障害児に比べて、共同注意の成立が困難であることが指摘されている。しかし、自閉症児の中でも知的に高い高機能自閉症児においては、共同注意行動が認められる場合がある。本研究は共同注意行動が出現する高機能自閉症児において、共同注意行動の出現の背景とその特徴について記述することを目的とした。

方法

1. 対象児 対象児は199×年生まれの自閉症男児である。2歳前に自閉症と診断された。2歳半頃から自発語が出はじめ、3歳では200語ほどの語彙を有していた。3歳3ヵ月で公立保育所に障害児保育の該当児として入所し、その後2年間をこの保育所で過ごした。5歳3ヵ月時に公立幼稚園に入園し、1年を過ごした後、小学校に入学した。本研究で対象とした期間は本児が4歳6ヵ月から6歳4ヵ月までの1年10ヵ月であった。5歳8ヵ月時に実施された新版K式発達検査における全領域の発達指数は108であった。

2. 手続き 本児はR大学の遊戯室で2週間に1回、約30分間の遊びを中心とするセッションに参加した。本児が4歳6ヵ月から5歳3ヵ月までは他者Aが、そして5歳4ヵ月から6歳4ヵ月までは他者Bが特定の他者として遊びの相手となった。VTRに収録された自由遊びの様子は、トランスクリプトされ、分析の資料として利用された。

3. 分析方法 1) 自由遊び場面の分析 筆者らを含む3名の分析者が、収録されたVTR資料を特定の他者への愛着行動、対象児の行動特徴などについて独自に分析し、合議により分析結果を集約した。

2) 共同注意行動の分析 先のVTR資料から指さし行動、giving行動、そしてshowing行動の3つの共同注意行動を抽出し、行動水準(応答/自発)、機能水準(伝達/非伝達)、そして意味水準(叙述/要求)の視点から分析した。

結果と考察

1. 特定の他者との愛着の形成過程と遊びの形態

本児と特定の他者A、B(以下、他者または他者A、他者B)との愛着の形成過程は、きわめて類似した経過をたどった。両他者との初回セッションで本児は母親からの分離不安を顕著に示した。例えば、母親の所在に言及する言葉を繰り返す、その所在を何度も強迫的に確認したり、移行対象と思われるボールやミニチュアのダンゴなど特定のモノを常に手から離さないなどの行動が支配的であった。したがって、他者による遊びへの誘いにも反応せず、他者とのやり取りは成立しなかった。その後、追いかけ遊びやトランポリン遊びなどの身体運動を伴う遊びが成立し、他者との快の情動共有体験が増えるにつれて、次第に他者との身体接触の機会が増えはじめた。6~8回のセッションが過ぎる頃には、他者をモデルとする模倣が頻発したり、本児の意に添わない他者の指示にも応じるなど他者への志向性が顕著になった。ちょうどこの頃に母親の所在を確認する発話や移行対象様の現象も消失し、分離不安が解消された。代わって、不安な対象にも他者の援助を得ながら挑戦したり、他者以外の部外者から咎められると、他者に援助を求める視線を送るなど、他者を心理

的な安全基地とみなした行動が出現した。この時点で本児は愛着対象としての他者との関係を形成していたと推察できる。

また、愛着の形成過程が両他者で類似するだけでなく、本児の遊びの形態においてもきわめて興味深い類似現象が認められた。遊びの形態は、やり取り自体が不成立の初回から、問いかけには応じるものの遊びの誘いに応じない時期、身体運動を伴う遊びに興じ快の情動を共有する時期、そして玩具や遊具を他者と共有し三項関係に基づく遊びが成立する時期へと発達変化を示した。愛着関係が成立し、三項関係に基づく遊びの時期がしばらく続いた後、ある特徴的な変化が出現した。縫いぐるみやその他の遊具に触発されて本児の内的活動が活性化し、それに伴う言語活動が活発化するにつれて、次第に他者とのやり取りに基づく遊びが少なくなり、ひとり遊びが主になった。愛着関係自体は一貫しており、その変質は認められなかったが、他者による様々な誘いかけにも関わらず、その後一向に遊びの質は改善しなかった。しかも、興味深いことに、こうした経過は両他者に共通して認められた。

2. 共同注意行動の特徴

前述した愛着関係の形成過程と遊びの形態の変化に基づいて、本研究の対象時期を、愛着形成の時期(第I期)、愛着の成立と遊びの共有の時期(第II期)、内的活動を基盤とする一人遊びの時期(第III期)、の3つの時期に区分した。そして、これらの時期区分に基づいて、本児の共同注意行動が分析された。対象期間に抽出された共同注意行動は延べ354場面であった。その内訳は、指さしの頻度が圧倒的に多く230場面、次いでgivingが71場面、showingが53場面であった。

図1は両他者との遊び場面で観察された指さし行動について、セッションあたりの平均頻度をそれぞれの時期ごとに示したものである。他者A、他者Bがともに本児の愛着対象となり、三項関係に基づく遊びが成立する第II期において、共同注意行動の頻度が最も高いことがわかる。このことから愛着対象の成立が共同注意に促進的に作用することは理解できるが、愛着関係が維持されているはずの第III期において共同注意行動が減少するのはなぜであろうか。おそらく、この時期に本児が内的活動への志向性を強め、遊びの形態がひとり遊びへと変質したことに起因しているのであろう。

特定の他者との愛着関係がある程度水準に到達し、三項関係に基づくやり取り遊びが成立してしばらくすると、やり取り遊びが成立しなくなるという現象は、本児に限らず多くの高機能自閉症児に共通しているように思われる。本研究の

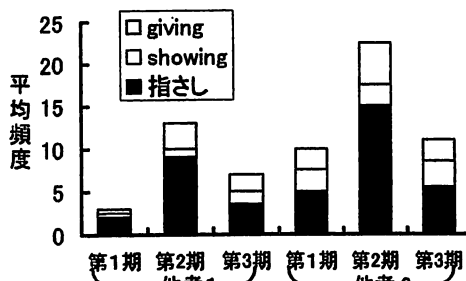


図1 自由遊び場面の時期別共同注意行動

結果はこうした臨床的印象を定量的にも裏付けたことになる。今後はこの現象の発生機序を探ることが課題となる。

(KAMIZONO Sachiro
TOYOSATO Yuna)

高機能自閉症児における自他認知の発達

湧川華奈子 神園幸郎

**日本特殊教育学会
第43回大会発表論文集. 2005年**

高機能自閉症児における自他認知の発達

○ 湧川 華奈子

(琉球大学教育学研究科)

神園 幸郎

(琉球大学教育学部)

KEY WORDS : 高機能自閉症児 自己認知 他者認知

目的

近年における特別支援教育の機運の高まりとともに、高機能自閉症児の教育が注目されてきた。高機能自閉症児における高い知的な能力は、必ずしも良好な社会的適応を保障するものではなく、むしろ彼らの社会性障害はその他の自閉症児と同様に深刻であることがわかってきた。高機能自閉症児の社会性障害の本質を理解し、その特徴を把握することは彼らの教育を考える上できわめて重要である。そこで、本研究では社会性障害の基底をなす自己認知・他者認知の発達を包括的に検討することを目的とする。

方法

1. 対象児 対象児は現在通常学級に在籍する7歳の自閉症男児(A)である。本児は9ヵ月頃に初語が出現し、2歳6ヵ月頃には絵本やビデオの言葉を覚えて話した。3歳10ヵ月時に公立保育園に障害児保育該当児として入所する。4歳8ヵ月時における新版K式発達検査の発達指数は105であった。

2. 分析資料 本研究は、ホームビデオ(0:00~4:08)、母親による手記(0:01~5:03)、保育士記録(3:10~5:03)、保育所巡回資料(3:10~5:03)、B大学のプレイルームにて月1回の割合で各約20分の親子自由遊び場面、特定の他者との自由遊び場面のVTR記録(4:07~5:03)を分析資料とした。

3. 分析方法 上述の資料から自己認知、他者認知に関するエピソードを抽出した。自己認知に関連したエピソード資料については、自作の指標に基づいて分類した。さらに他者認知については、本児と母親、父親、姉、保育士、その他の他者との反応性、愛着行動の質などの視点から分析を行った。

結果と考察

本児は、「生後10ヵ月頃から名前を呼んでも聞かない(振り向かない)ことが多くなってきた」(epi. 1, 母手記, 0:10)とあるように、この時期から母親との関係に困難を示しはじめていた。また、2歳0ヵ月における保育所での呼名による出席確認では、返事はなく黙ったままであった。ところが、2歳6ヵ月時になると、ビデオカメラのモニターに映っている自分の顔に対して微笑み、母親の「誰? Aがいる」という言葉に反応し、自分の鼻を指差すという姿が見られた。これは、本児がこの時期にすでに視覚的に自己像を認知することができていたことを示唆している。また、同じ2歳6ヵ月時に、「保育園に入園して初めて、朝の出席のお返事に『はい』と大きな声で手を挙げる」(epi. 2, 母手記, 2:06)という動作が可能となった。さらに、目、口、鼻等の漢字カードに対応した自己の身体部位を特定できるようになり、入浴の際には自分の身体を意識しながら洗うなど、名前や年齢などの自己の属性に加えて、自己の身体についての関心が出現した。そして、2歳11ヵ月になると、自己を対象化して捉えはじめた。それは、「いつものように母さんとパズルを仕上げると、パズルを持ち上げ、お父さんの所へ行き『おとうさん、みてー』と…」(epi. 3, 母手記, 2:11)といったエピソードからもうかがえる。この時期から、本児は自己に向けられた他者の志向性や評価(誉められる、叱られる)を受けとめることができるようになったと推察される。しかし、ここで本児が受けとめることができる他者からの評価は、相手が特定の他者で、

しかも表情や声の調子等の直接的に知覚できる情報に基づいていた。上記のエピソードのような事態では、本児にとって父親は自らに快の情動を導く評価をしてくれる特定の他者として認識されているため、本児は父親に対して上述のような働きかけを試みたものと思われる。こうした働きかけは、父親をはじめ、母親や担当保育士にのみ限られていた。姉や保育所の仲間である他児を含むその他の他者に対しては、相手から正の評価を受けると喜ぶものの、自ら相手に評価を求めることはなかった。3歳9ヵ月になると、他者からの支援を受けることを嫌がり、何でも「自分で!」と主張することが多くなり、自己意識が強まった。3歳11ヵ月頃からは、叱られるとこれまでのように泣くのではなく、特異な行動を示すようになった。たとえば、「叱られたことがイヤだったようで、衣服を脱ぎ、水で濡らすと『濡れてる、濡れてる』とその服を見せて、怒っているような表情をみせる」(epi. 4, 保育士記録, 3:11)というように、本児は叱られたことによる不快な感情を以前に経験した不快な場面を再現することで表出した。ここでも本児は、相手の叱るという行為の背景を理解しているとはいえず、相手の叱る行為と自己の不快な情動の随伴性を表示しているに過ぎない。ところが、4歳4ヵ月になると、次のようなエピソードがみられた。「強い口調で注意すると、目をじーと見つめ『やくそく』とゆびきりげんまんを自分から手を出して反省の言葉を言う」(epi. 5, 母手記, 4:04)。これは、本児が母親からの非難をかわすために、既に獲得されている行為を用いることで、母親の感情をとりなしている場面として理解できる。この時点で、本児は叱っている他者の行為の背景に何らかの意図や情動の変化を覚知していた可能性がある。しかし、このような働きかけは母親と保育士との関係においてのみ認められた。したがって、母親や保育士に限って、本児は彼らを何らかの心的世界を有した他者として認知していたものと思われる。その後、5歳を過ぎる頃になると、「『お昼寝は?』と聞くと首を横に振る。『え〜』と母親がびっくりした声で言う『なんで〜、静かにしているよ』が返ってきた」(epi. 6, 母手記, 5:02)といったように、母親による非難の原因を推測して、その非難が当を得ていないことを説明することで、母親の非難をかわすことができるようになった。母親の行為の背景をなす内的状態を表象し、それに直接的に働きかけることができるようになった。これは、4歳4ヵ月時にみられたepi. 5の相手の情動と自らの行為の随伴関係を調整する仕方とは質的に異なっていることは明らかである。さらに同時期には、「お姉ちゃんに『どれがいい?』とおもちゃを選ばせ、ひとつのおもちゃを選ぶと『やっぱり…』と相手の心理をよんで出た言葉を使う」(epi. 7, 母手記, 5:02)という記述が見られた。これは、姉の意向を予測していたかのような反応である。

上述した本児の自他認知の発達は、本児と特定の他者の2者関係に特有な発達過程を示し、しかも特定の2者関係においても状況や場面の違いによって、自他認知の様相が異なる特徴を示した。高機能自閉症児の社会性障害を理解する上で、彼らの自他認知の発達をより詳細に描き出す必要がある。

(WAKUGAWA Kanako, KAMIZONO Sachiro)

高機能自閉症児における社会性の発達と描画の変化

大城理恵 神園幸郎

日本発達心理学会
第17回大会発表論文集. 2006年

高機能自閉症児における社会性の発達と描画の変化

大城 理恵 神園 幸郎
(琉球大学教育学研究科) (琉球大学)

目的 従来、自閉症児の描画に関する研究は、自閉症児に特有な描画の発達変化や描画表現の特異性を指摘するものが多かった。幼児期に出現した描画の特異才能として知られている Nadia の事例は、その一つである。この事例を報告した Selfe(1977)によれば、Nadia の描画は社会性の発達とともに次第に稚拙になったことが指摘されている。描画の変化は社会性の発達を反映する側面があることが知られているが、自閉症児について描画の変化と社会性の発達の関連性を詳細に記述した研究は少ない。そこで、本研究は自閉症児の社会性の発達と描画の変化の関連性を明らかにすることを目的とする。

方法 **対象児**：現在、小学校 1 年の通常学級に在籍する自閉症男児(K)である。本児は知的障害を伴わない、いわゆる高機能自閉症である。4歳 10 ヶ月時に公立保育所に障害児保育該当児として入所し、指導を受ける。5歳 10 ヶ月で公立の幼稚園に就園した後、6歳 10 ヶ月時に小学校に就学した。

分析資料：母親の手記、手記中に添付された K 児の描画、保育記録、保育所在籍中の K 児の描画

分析方法：描画については、描画内容及び描画方法から描画の認知的背景を中心に分析した。社会性の発達については自作のカテゴリーに基づき分析した。

結果と考察 K 児が描いた描画のうち、出現頻度が高かった人物画、アニメのキャラクター、そして、電柱の 3 種類について、それぞれの発達に伴う変化の特徴を抽出し、本児の行動から推察された社会性の発達変化との関連性を検討した。人物画は 3歳 2 ヶ月時に輪郭がない目と口だけの描画として初出した。3歳 10 ヶ月で顔に手と足がついたいわゆる頭足人が現れ、4歳 1 ヶ月になって胴体のついた人物画が完成した。キャラクターの描画は初発が 2歳 7 ヶ月であり、人物画よりも早く出現するが、やはり顔に限定されていた。キャラクターについては頭足人の描画は見られなかったが、胴体が出現し全身像が完成する経緯と時期は人物画とほぼ一致した。本児はキャラクターを人物と同種のものとして認識していたことが推察される。人物画が完成してしばらくすると(4歳 3 ヶ月)、自画像からはじまり、父母や姉などの家族が描かれるようになった。4歳 4 ヶ月で家族以外の匿名的な他者が描かれるようになり、4歳 8 ヶ月ではそれまでの具体的な人物画が、イラスト的もしくは略図的、記号的な形態に変化した。ほぼ同時期にキャラクターの描画も、それまでの各部の詳細な再現から、たとえば手や足を極端に拡大するなどデフォルメした描画が出現した。人物像の一般的な描画表出が可能になると、その枠組みを参照することで自己及び身近な家族を表象として再現するようになり、匿名的な他者像の描画表現を経て、イラスト的もしくは記号的な人物画の表現へと移行する順序性を見ることができる。この時期までの K 児の関わりは、専ら家族との関係が主であり、しかもその関わりは K 児の快の情動と他者の行動との随伴性を核とするパタン化したものであった。同様な関わりは保育園の担当保育士との間には成立するものの、他児との間にほとんど認められなかった。ところが、5歳を過ぎる頃になると、保育所での出来事の描画に特定の他児を描き入れることがみられるようになった。この時期は、保育所の生活に慣れ、集団での設定遊びなども一通りこなせるようになって、他児とも一定の安定的な関係を構築できていた。ところが、5歳 4 ヶ月頃になって勝負へのこだわりが出現し、他児を過剰に意識しはじめるようになった。5歳 8 ヶ月には、他児との関わりのすべてを勝ち負けの枠組みで捉えるようになり、常に自分が一番でなければ気がすまなくなった。その結果、他児との間にさまざまな場面で摩擦を生じるようになった。この時期には、それまで多く描いていた特定の他者を描きこんだ絵日記風の描画が完全に消失した。かわって、3歳 9 ヶ月に初出して以来、不安や不快などの抑圧的な状況で頻発していた電柱の絵が頻繁に描かれるようになった。しかも、以前の描画とは異なり、電柱だけでなく人や車などを描きこみ、ファンタジー的な要素が加味されたものであった。しかも、電柱を描いている時の発話は、K 児の内的世界を彷彿とさせる内容で満たされていた。この時期を境として、K 児におけるファンタジー世界への傾倒現象は、描画時に限らず様々な場面で認められるようになった。

K 児の描画、とりわけ人物画の発達変化は、社会性の発達をよく反映することが明らかになった。

高機能自閉症児の社会性障害とファンタジー世界への傾倒

湧川華奈子 神園幸郎

日本特殊教育学会
第44回大会発表論文集. 2006年

高機能自閉症児の社会性障害とファンタジー世界への傾倒

○ 湧川 華奈子

(琉球大学教育学研究科)

神園 幸郎

(琉球大学教育学部)

KEY WORDS: 高機能自閉症児 社会性障害 ファンタジー

目的

高機能自閉症児が示す社会性障害は決して軽くはなく、知的に高いがゆえに逆に一層深刻になる場合が多い。高機能自閉症児の対人社会性を阻害し、社会性障害の重篤化をもたらす要因として、ファンタジーへの没入現象が指摘されている。本研究は高機能自閉症児におけるファンタジー世界への傾倒現象について記述することを目的とする。

方法

1. 対象児 本研究は、以下の2名を対象児とする。

対象児1: 現在A中学校3年に在籍する高機能自閉症男児(B児)である。B児は1歳頃に「わんわん」などの発語がみられ、2歳2ヶ月頃には簡単な文章が読めるようになった。さらに、3歳頃には一語発話で要求を表すようになり、その後急速に語彙数が増えた。5歳8ヶ月時の新版K式発達検査における全領域の発達指数は108であった。

対象児2: 現在C小学校2年に在籍する高機能自閉症男児(D児)である。D児は9ヶ月頃に言葉が出現し、2歳6ヶ月には絵本や学習ビデオの言葉を覚えて話した。4歳8ヶ月時の新版K式発達検査の発達指数は105であった。

2. 分析資料 R大学の遊戯室にて月1回の割合で各約20分の親子自由遊び場面(以下、母子VTR)、特定の他者との自由遊び場面(以下、他者VTR)のVTR記録を分析資料とした。分析対象期間は、B児が4歳5ヶ月から5歳10ヶ月であり、D児は4歳7ヶ月から5歳11ヶ月である。

3. 分析方法 上記の資料からイメージを介した遊び場면을抽出した。抽出に際しては、自作の分類指標を用いた。

結果と考察

1. B児の遊びの特徴 本児の遊び場面において観察されたイメージを介した遊びは、概して次に示した3つの特徴に集約された。まず、第一は、本児のこだわり起源を発するものである。例えば、「母親がB児の乗っている三輪車を後ろから押すと、『13階行く。』『13階、こっちは違うよ、5階だよ。13階行く。』『13階は回ってから行く。』と言いながら部屋を回る。」(epi.1.母子VTR,4:05)といったエピソードがある。本児は保育所に登所するとすぐにカレンダーで日にちを確認したり、指を変形して数字を模ったりするなど、数字に対して強固なこだわりを示していた。上記のエピソードのように、自己のこだわりに関連する過去の体験、すなわち車で立体駐車場を階上へ登る体験が想起され、次第に階数だけに焦点化してエスカレートしていくような展開が頻りに観察された。第2は、心理的外傷体験を引き起こす可能性が想定される過去の不安・不快な出来事の再現と関わるものである。例えば、「ぬいぐるみに向かって『パンパースかえる?』と言って、ぬいぐるみにパンパースをはかせる遊びを始める。他者が持ってきた広告をパンパースに見立て、『はい。うんこふき、はい、元気になった、パンパースはいたから』『あんた、チューチュー飲んでるからね。』などと話ながら遊ぶ。」(epi.2.他者VTR,5:02)というエピソードである。本児は幼児期前期に自己の排泄物に驚きパニックを引き起こして以来、トイレに対して恐怖反応を示し、排泄の自立が極端に遅れた経緯があった。上記のエピソードは、過去において自らにとつ

て不快や恐怖をもたらした事態を再現し、縫いぐるみを対象として遊びに展開したものであった。しかし、このエピソードに見られる本児のプレイフルな行動には、排泄に対する当時の不安や恐怖の感情は微塵も感じられず、本児が遊びとしてこの展開を楽しんでいることがわかる。このことは、自閉症児によく見られるフラッシュバックやタイムスリップ現象とは質的に大きく異なると言えよう。第3は、遊びの場に起源を持つイメージ遊びである。例えば、輪投げの輪を頭に載せ、シャンプーハットに見立てた上で、シャワーを浴びる動作に展開するなど、自らの日常生活動作を再現しつつ縫いぐるみを対象とした遊びへと展開した。

2. D児の遊びの特徴 本児のイメージを介した遊びは、以下に示した3つの特徴を示した。一つは、イメージ遊びの展開に豊富な連想や見立てが出現する点である。母親の場所を問う質問に、「夏」、「海」、「川」というように「いま・ここ」以外の空間を連想によってイメージしたり、水を「雨」、石鹸の泡を「雪」などに見立てた上で遊びを展開することができた。しかも、こうした連想や見立てはパタン化することなく、状況に応じて柔軟に変化した。二つは、本児のイメージ表現が物語風の表現形式をとる場合があることである。例えば、「多くのぬいぐるみを自分の周りにたくさん集めて、かき混ぜるような仕草を見せて『皆にわーっと助けてーと言いました。』と言う」(epi.3.母子VTR,5:07)といったエピソードがそれである。このことは本児が一定の物語調の表現技法を獲得していることを表している。三つは、縫いぐるみやフィギュアを擬人化して遊びを展開することである。本児は収集したキャラクターの縫いぐるみやフィギュアに強くこだわり、遊ぶときには、まずそれらを自分の周りに配置することからはじめた。当初はモノとしての縫いぐるみやフィギュアへのこだわりであったが、次第に擬人化したかかわりが前面に出はじめた。例えば、「トランポリンでジャンプをする際に、他者と姉と手をつないで輪になって飛んでいたが、『4人で』と言って、自分のお気に入りのぬいぐるみ(動物)の片手をつなぎ、もう片方の手は他者につなげ、ぬいぐるみも含めて、輪になってジャンプする。」(epi.4.他者VTR,5:07)といったエピソードが観察された。

3. B児とD児のイメージ遊びの共通性と差異性 まず、共通性として指摘できることは、両者ともにイメージ遊びが過去の体験を土台として展開されるということである。とりわけ、B児は過去の体験をそのままなぞったようなイメージ遊びが多かった。また、B児が「数字」、そしてD児が「縫いぐるみ」「フィギュア」に強いこだわりを示し、これらのこだわりを基点としてイメージ遊びやファンタジー世界へ傾倒する傾向が共通して見られた。次に、両者が異なる点として、まず一つは、B児は過去の不快・恐怖をもたらした出来事をファンタジー化することがあったが、D児にはこうしたことは見られなかった。二つは、D児はファンタジー世界を創り出すための表現形式を持ち合わせていたが、B児には見られなかった。以上の共通性と差異性をもたらす背景要因について検討中である。

(WAKUGAWA Kanako, KAMIZONO Sachiro)